

日本におけるリサーチ滞在報告書

ハリー・エアーズ

私は、第14回上海ビエンナーレ「Cinema Cosmos」のキュレーター・チームを代表して、国立アートリサーチセンターの「国際展ディレクター・キュレーター等招聘プログラム」に参加するという貴重な機会に恵まれた。

2023年11月8日に開幕し、2024年3月31日に閉幕した上海ビエンナーレは、中国・上海のパワー・ステーション・オブ・アート（上海当代芸術博物館）を舞台に、進化し続ける人類と宇宙との関係を理解するため、様々なアーティストの手法の分析を試みるものだった。この展覧会は、私たちの物質的・心理的な宇宙との関係が、地上のすべての生命に影響を及ぼしており、それを再考することで我々が共存していく方法を考えるというテーマに基づいている。

近年、来場者に地球上の生命を形作る複雑なシステムと人類との関わりの再考を促す展覧会が急増している。第14回上海ビエンナーレは、私たちが地上だけでなく宇宙のシステムにも絡め取られていること、また同時に、この視点の転換が地球上の生命に及んでいる危機に対処する一助となるかもしれないということを主張する初めての大規模な国際展であった。私たちは宇宙の「外」にいないのではない。これは宇宙旅行やSFに特化した展覧会ではなく、むしろ、キュレーター・チームは常に我々が宇宙の一部であるという事実を、アーティストたちがどのように解釈するのかに興味があった。

日本でのリサーチは、ビエンナーレのテーマを理解する上で大きな意義を持つものだった。2023年7月に来日した際には、展覧会のテーマに関連した作品を制作している日本のアーティストのスタジオを訪問したほか、日本各地の美術館で多くの展覧会を観ることでキュレーターとしての知見を拡げることができた。また、国立アートリサーチセンターの方のおかげで、東京のアートシーンの様々なプレイヤーに会うことができた。

このリサーチでは、最初に滋賀にある笹岡由梨子氏のスタジオを訪ねた。キュレーター・チームは以前より、インスタレーション、絵画、刺繍、ビデオアート、パフォーマンスと幅広く活動する笹岡氏にぜひ出展してほしいと考えていた。彼女の作品は、演劇や歌謡といったエンターテインメント・メディアにおける表現の可能性と限界について探求しており、政治性やジェンダー規範を象徴するようなマリオネットを使ったビデオ・インスタレーションで、鑑賞者を現実と超現実の狭間へといざなう。

上海ビエンナーレに、笹岡氏の Gyro シリーズから3点の刺繍絵画を出展いただけたことは幸運だった。悪魔がルームランナーの上を走ったり、バランスボールの上で跳ねたりするキャラクターとして描かれ、一見すると空想的に見えるこれらの作品は、実際には2011年の東日本大震災のトラウマに対する直接的な反応として、またそれに対処する手段として制作された。このシリーズは、災害の危険にさらされている地域に住む人々、あるいは笹岡氏

が言うように "生と死の狭間 "にいる人々の集合意識に訴えかけようとするものである。上海ビエンナーレにおいてこれらの笹岡氏の作品は「部分日食」という章で展示された。この章は、目には見えず、理性では理解できず、知ることさえできないかもしれない宇宙現象を扱っている。宇宙の大部分を占めると言われる仮説上のエネルギーである「ダークエネルギー」のように、こうした力はあらゆる尺度で物質に作用しているが、表現することは発見することと同じくらい困難なものである。人類は、物質とエネルギーの知らざる形態を解き明かすために、芸術的表現を含め多くの戦略を試みてきた。笹岡氏の作品は、科学的な客観性や抽象的な論理の限界を超え、恍惚とした啓示や神秘的な体験として宇宙の力を体現した他の作品群と共に展示された。

東京に戻ってから、横浜の BankART で上映会を準備中の映像作家、牧野貴氏にお会いした。牧野氏は、プロのカラリストとして数多くの長編映画やミュージックビデオを手掛けているが、2004 年からは自身の映像作品も発表しており、自然現象、人物、街並みやファウンドオブジェを組み合わせて有機的で想像力をかき立てる映像を作り出す。牧野氏は、パンデミック中に制作したものを含む、近年の映像作品を複数見せてくれた。

牧野氏は才能豊かなパフォーマーでもあるため、キュレーター・チームは、牧野氏の作品を展示だけではなく、パフォーマンスとしても紹介したいと強く願っていた。映像にライブ音楽を組み合わせる彼のパフォーマンスを通して、鑑賞者にとってまったく新しい「宇宙」を体験してもらえと思ったのだ。結果として、上海ビエンナーレでは牧野氏が2016年から2018年にかけて手掛けた作品である「Memento Stella」をパフォーマンスとして上演した。このパフォーマンスで使用されたビジュアルは、200 レイヤー以上の 4K ビデオ映像で構成されており、私たちが星々の間に存在していることを思い起こさせる。牧野氏曰く、このパフォーマンスは「私たちが結びつけているのは死だけではない」という事実、そして「私たちは皆、星々の間のこの小さな惑星で共に生きているのだ」ということを思い出せば、「私たちが分断しているように見える違いを超えて連帯することができるかもしれない」という思いから生まれた。

展覧会では、16 分のシングル・チャンネル・ビデオ「Anti-cosmos」を展示した。このビデオでは、何千ものファウンドオブジェのイメージを重ね合わせ、幻惑的な螺旋構造として合成している。この作品は、生命が太陽に依存する存在であることを扱う作品を集めた「太陽のアセンブリ・ライン」という章の、真っ暗な空間に展示された。太陽は歴史的に絶対的な権威の象徴であったかもしれないが、同時に変化を引き起こす存在でもある。太陽活動の周期は、地球の好景気と不景気、革命、疫病、人口移動の時期と相関関係がある。本章の作品は、太陽、月、惑星を、世界の秩序を永遠に保証するものとしてではなく、抵抗の場、解放のダイナミズムの源として、自由に夢見することを鼓舞し、その力を与えることができるものとして表している。太陽に対する勝利は、人類の死に対する究極の勝利となるかもしれないし、我々をより深い混沌へと陥れるものかもしれない。

その後、港区に移動し、神戸出身で現在は千葉を拠点に活動するアーティスト、河川龍夫氏の作品調査のために、YOKOTA TOKYO を訪れた。今回は、河川氏の COSMOS シリーズを見せていただいたが、デジタル画像でしか見たことのなかったこれらの作品を実際に目にして感銘を受けた。河川氏は COSMOS シリーズを通して長年、「関係性」というテーマの探求を続けており、光と闇、個人と社会、歴史的時間と現在など、さまざまな現象の中に存在する関係を視覚化する。ギャラリーで見た数点の作品では、河川氏は星座を写した天文写真に水彩で文字を書くことで、それぞれの星の光が地上に届くまでの時間を示している。星を眺めるとき、実は遠い過去に発せられた光を見ているという事実は、時間や空間、宇宙における私たちの在処について考えさせられる。これらの作品は、星を眺めるという行為でありながら、さまざまな視点から空間を理解するというメタ的な地理学でもあるのだ。河川氏の作品は、星を見るという行為そのものを再現することで、私たちの内なる元素の宇宙と外なる恒星の宇宙との本質的なつながりを強調している。星を見るたびに、私たちが同じ原子原理から構成されていることを思い知らされるのだ。こうして、星を見るという行為は、星からの光を受けることによって私たちが元素的に新しく生まれ変わるといふ、循環的な関係になる。

河川氏の作品は、「時間と空間の」という章に展示された。空間は社会的に生み出され、経験され、理解されるものである。イデオロギー的、哲学的、心理学的な偏見は私たちの描く「地図」に影響している。測量地図を上から眺めれば、神のような、時間を超越した視点を持ったような気がするが、時間と空間が切り離せない宇宙の「地図」には、上や下という概念は無意味である。河川氏の作品と並んで展示されているのは、宇宙が広がる多次元をどのように表現することができるか、またそもそもそれが可能なのかについて考える作品群である。この章に集められた「地図」は、視点の数だけ多様な宇宙を描写し、相互に作用しあうことで宇宙の全体像を仮定的に描き出す。河川氏の作品はこの一部として、一般によく知られた遠近法というものを鑑賞者に再考させながら、空間と時間とはもともと捉えどころがなく奇妙で、変わりやすくまた壊れやすいものであることを思い出させてくれる。

NCAR は寛大にも、私のためにこれら以外のミーティングもいろいろと準備してくれた。東京のアートシーンで活躍する多くの若手アーティストを含む、このような活気ある人々の集まりに参加できたことは、とても素晴らしいことだった。東京で出会ったアーティストやキュレーターの何人かと、すでにいくつかのキュレーション・プロジェクトを進めている。（その一つの結果として、2024年4月にはニューヨークの e-flux にあるスクリーニングルームで、沖縄出身のアーティストによる映像作品の上映会を開催した。）

私を含めた上海ビエンナーレのキュレーター・チーム全員は、ビエンナーレの成功に尽力してくれた NCAR に限りなく感謝している。展覧会の成功の一端を担ったのが、私の日本でのリサーチ旅行であることは間違いない。